

幼児期における「言語活動の充実」の測定と評価に向けて

—「聞く力」を量的に捉える試み—

Toward the Measurement and Evaluation of “Enrichment of Language Activities”
in Early Childhood

— Trial to quantitative analysis “Listening Ability” —

次世代教育学部教育経営学科

岡野 聡子

OKANO, Satoko

Department of Educational Administration
Faculty of Education for Future Generations

関西国際大学教育学部教育福祉学科

吉村 啓子

YOSHIMURA, Keiko

Kansai University of International Studies
Department of Education and Social Welfare
School of Education

次世代教育学部こども発達学科

大野 鈴子

OHNO, Reiko

Department of Child Development
Faculty of Education for Future Generations

キーワード：言語活動の充実，幼児教育，幼小中連携教育，聞く力の育成，教育効果の測定

Abstract : This paper aims to measure and evaluate the “enrichment of language activities” in early childhood. This research pays particular attention to listening ability. During supervised activities, teachers are required to know how to measure and evaluate the effects of their educational content. Currently, there is a lack of research in this field. In this study, measuring listening abilities of two separate kindergartens were performed. In the first kindergarten, enrichment of language activities is present, whereas in the second kindergarten enrichment of language activities was more ambiguous. A measurement of listening ability carried out KyodaiNX5-8. The results from kindergarten A and kindergarten B did not produce significant difference in listening ability. From this point, there is a necessity for an improvement in the methods of measuring capabilities along with considering the measurement of speaking ability which includes discussion.

Keywords : Enrichment of language activities, Early childhood education, Education of bridging gaps between preschool and elementary school and junior high school, Training of listening ability, measuring the effects of training

1. はじめに

新学習指導要領では、「思考力・判断力・表現力等の育成」がテーマとなっている。その中でも重要なキーワードとして「言語活動の充実」が取り上げら

れ、小学校では平成23年度に、中学校では平成24年度に新学習指導要領の完全実施がなされた。

学習指導要領改訂以降、国語科が中心となり各教科における言語活動の充実が図られ、指導法やカリキュラム作成といった事例研究や実践報告も数多くみられ

る。しかしながら、学校教育のはじまりと位置付けられる幼稚園では、言語活動や言葉の教育に関する研究は、質・量ともに小学校での研究に比べて十分とはいえない。岡野・大野（2012）は、平成23年に言語活動の充実に関する研究が幼稚園の教育現場においてどの程度意識されているのか、またどのような実践が行われているのか岡山市の公立幼稚園にて調査を実施した。本稿では、そうした幼稚園における言語活動の充実あるいは言葉の教育の取り組みが子ども達にどのような効果をもたらしているのか量的に調査を試みるものである。

子どもの育ちを可視化し、教育実践が効果的に行われたかを教員が振り返るためには、教育効果の測定と評価が必要である。しかしながら、幼児教育においては、小学校以降の教科の学習とは異なり、遊びを通して総合的に学習されるため、「見えない教育」と言われ、その教育効果を量的に測定したものは管見するあたり数が少ない。また、今回の調査では、「聞く力」の測定に特化した。幼児期における言葉に関する研究では、「聞くこと」よりも「話すこと」に着目した研究は多いが、「聞くこと」の研究に関しては、静かに聞いているかといった幼児の態度や行動といった外的要素から「聞く」力の育成を量的に測ろうとしているもの（芝崎良典・芝崎美和，2011）しかみられない。岡本（1995）は、「子どもは、先生が皆に話していることは、自分に話していることと同じとしてうけとめる態度が求められているわけです。こうした注意が5歳頃になると子どもの側にかなりでき始めるのですが、学校生活が始まると、それがはっきりとした授業の形態をとって、外側から子どもに要求されてくるわけです。」とあるように、学校では、先生が皆に話していることは自分に話しかけられているものとして聞く力が求められる。本稿では幼児期における「言語活動の充実」の測定と評価について、京大NX5-8を用いて内容の理解度といった観点から、「聞く力」の内的要素を量的に捉えることを試みた。調査対象園の選定方法については、3. 調査概要にて詳述するが、まず、調査対象園のうち、言葉の教育に特に力を入れている園である岡山市立A幼稚園の実践を紹介する。その際、岡山市の教育施策に触れながら、A幼稚園が位置する岡山市I中学校区の「言語活動の充実」をテーマにした幼小中学校の学びの連続性のモデルについても取り上げることとする。

2. 調査対象園の教育実践活動

調査対象園での教育実践活動を述べるにあたり、その前提となる岡山市の取り組みについて俯瞰する。

(1) 「学びの連続性＝岡山型一貫教育」とは

岡山市では、平成14年から岡山市地域協働学校施策に取り組んできた。この施策は、家庭・学校園・地域社会をつなぎ、三者協働による「自立」する子どもの育成を具現化することを目的として始められ、学校運営を活性化するとともに、家庭や地域社会の教育力向上を図るシステムを作ること、子どもの育ちを連続的に支援するシステムを作ることの取り組みを行っている。この施策の一環として、平成19年には、岡山市と岡山市教育委員会が「岡山市市民協働による自立する子どもの育成を推進する条例（愛称：岡山っ子育成条例）」を制定した。この条例の目的は、「子どもたちが愛されていると実感できる家庭、学校園、地域社会を実現し、市民協働による「自立する子ども」の育成の推進」である。

以下の図1は、この条例の目的を具体的な形として図に表したものである。

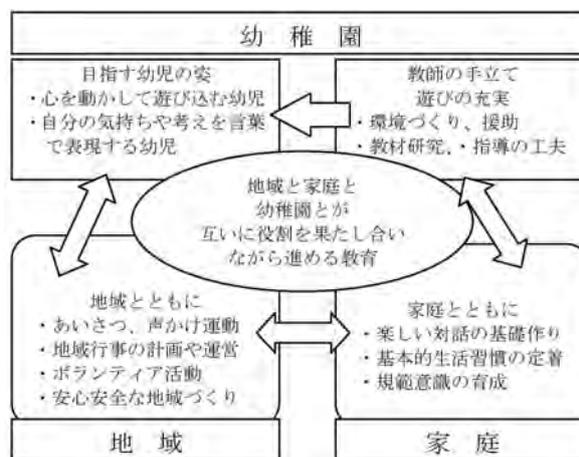


図1 「岡山市市民協働による自立する子どもの育成を推進する条例」の具体的な連携内容

*「地域、幼稚園、家庭」の場合
出典：「平成24年度いきいき学校園づくり北2ブロック公開保育」の資料から（紙面の関係上、筆者が図の加工をした。）

岡山市によれば、こうした取り組みに期待されている効果は次の3つである。1つ目は、保護者や地域住民の学校運営への参画によって、家庭・学校園・地域社会の信頼関係の再構築や深化につながることで、2つ目は、家庭・学校園・地域社会の役割・責任を明確に

した実践を通して、家庭や地域社会の教育力の向上に期待ができること、3つ目は、中学校区内の学校園が一体となった取り組みを行うことで、幼児教育・小学校・中学校が緊密に連携した段差のない教育支援の推進を行うことができるのである。このように、「学びの連続性＝岡山型一貫教育」では、家庭・学校園・地域社会の三者協働による教育システムの構築や各自治体が幼小連携や小中一貫教育を行う中で、幼児期からの学びの連続性に着目し、幼小中連携教育の実践を行っていることが特徴であると言えるだろう。

次に、岡山市地域協働学校事業における岡山市I中学校区の取り組みを紹介する。

(2) 岡山市I中学校区の「学びの連続性」モデル

岡山市I中学校区では、子どもの育ちに関して、「自己肯定感が乏しく、よりよい人間関係をつくるために必要な力が弱い」ことが課題として研究協議会等において取り上げられてきた。これは、平成19年度から実施されている「全国学力・学習状況調査」の結果および園児・児童・生徒の実態調査から浮彫になった課題である。中学校の調査結果では、「書くこと」や「説明をすること」などの記述式の設問において他の設問より正答率が低いことや無回答が多く、苦手意識を持った生徒が多いと考えられた。

そのため、「自分の考えを相手にきちんと伝え、相手の考えや思いも受け入れ、良好な人間関係を築いていく力は、将来社会人として必要な力であり、そのためには自分の思いや考えを相手に分かりやすく適切な表現で伝える力が必要である」と「言葉」の育成をキーワードとして、I中学校区では『表現する力の育成』を教育目標に掲げて教育実践を行うこととした。それに基づき、I中学校区の中学校では、「表現する力の育成」を研究テーマに、副題には「言語活動の充実を通して」を掲げ、幼稚園や小学校においても、子どもの言葉の育成、言語活動の充実をテーマとした教育活動に取り組むこととなった。以下の図2は、岡山市I中学校区で幼稚園・小学校・中学校と段階的に取り組まれる「表現する力の育成」を示した図である。

また、こうした学びの連続性を意識した教育活動を形骸化させないためにも、岡山市では、「いきいき学校園づくり」という教育実践活動に取り組んでいる。これは、幼稚園や小学校、中学校が校種の枠を超えて保育実践や授業実践の取り組みを公開したり、出前授業を行うなどの事業である。事業実施後の研究協議会の集まりでは、幼・小・中学校の教師が集まり、それ

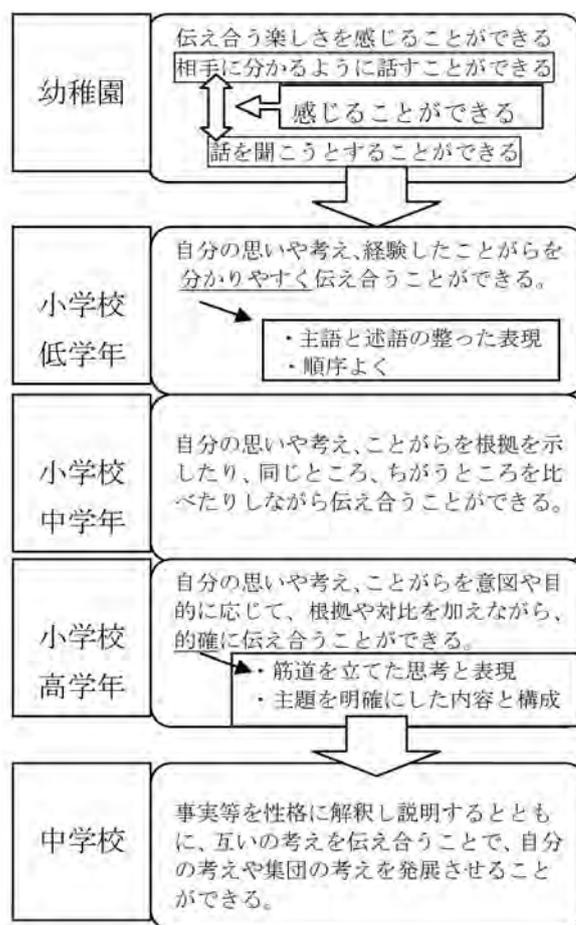


図2 「I中学校区で育てたい「表現する力」の発達段階」

出典：「平成24年度いきいき学校園づくり北2ブロック公開保育」の資料から（紙面の関係上、筆者が図の加工をした。）

ぞれに意見交換し、教育計画や内容の情報交換を行っている。そうすることで、たとえば、幼稚園教諭が小学校にて子ども達がどのような教育を受けるのかを教育現場を目の当たりにでき、学びの連続性を意識した教育活動を展開することを可能にしている。

(3) 調査対象園における「言葉」の教育実践活動

本調査対象園である岡山市I中学校区にあるA幼稚園の学区は、北に美しい景観と山登りで親しまれている山々があり、昔ながらの田園風景が残っている。また、岡山駅から近く、交通の便も良いため、近年では新興住宅地としても人気の場所である。

A幼稚園の園児数は60名ほどであり、年少組2クラスと年長組1クラスの3クラス編成である。「心豊かでたくましい子どもを育てる」ことを教育目標として掲げ、目指している幼児の具体的な姿としては、「明るく元気な子ども、やさしい子ども、考えるこども」を取り上げている。A幼稚園では、指導の重点とし

て、「人とかかわることを楽しむ幼児の育成～言葉のキャッチボール（話す・聞く・伝え合う）を楽しむ幼児をめざして～」を掲げ、これまで言葉の教育に力を注いできた。

A幼稚園では、平成23、24年度と『園生活を楽しむための力の育成』を主題とし、副題はA幼稚園の指導の重点である「言葉のキャッチボール（話す・聞く・伝え合う）を楽しむ幼児をめざして」を掲げて実践研究に取り組んだ。実践研究結果では、幼児はいろいろな人とかかわる経験、心を動かす体験を重ねる中で、自分の思いを表現すること、相手の話を最後まで聞くことの大切さを知り、言葉で思いを伝え合う喜びを感じ、話したい、聞きたいという思いをもつことが、園生活を楽しむための力につながると教員同士の共通理解を形成することができた。平成25年度は、これまでの実践研究を踏まえて、言葉のキャッチボールを行う上で不可欠である「人とのかかわり」に焦点を当て、『人とかかわることを楽しむ幼児の育成』を研究主題とし、また、指導の重点は「言葉のキャッチボール（話す・聞く・伝え合う）を楽しむ幼児をめざして」と変更をせずに取り組むことにした。実践研究における目指す幼児の具体的な姿としては、①思いやりの気持ちをもつ幼児、②心を動かして遊び込む幼児、③言葉で伝え合うことを楽しむ幼児の3つを取り上げている。また、研究の視点として、①幼児の実態や発達課題を明確にした援助のあり方について、②話したい、聞きたいという思いを育てる環境構成、活動内容、援

ね ら い	○遊び方や仕事の手順など、 <u>自分の考えを出し合ったり、相手の考えを受け入れたりして、力を出し合って活動する楽しさを味わう。</u>	内 容	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな運動遊び ・友達と一緒に十分体を動かす ・自分なりの目あてをきく ・音楽に合わせてリズムを合わせる ・<u>友達と相談したり、自分の思いや考えを表現したりする。</u> ・友達の良いところや長所を認めたりする ・友達と共通の目的や目標を達成する ・ドングリやマツボックリを味わったりする ・サツマイモの収穫の喜びを味わう
	○自分が感じたことや考えたことを十分に表現しながら遊ぶ。	容	
環 境 及 び 教 師 の 援 助	<ul style="list-style-type: none"> ・遊びの様子から幼児がしようとしていることや遊びに対するイメージを探り、その体を十分に動かして、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができるように、い安全面に配慮した遊具の置き方や扱い方に気付くことができるようにする。 ・運動会に向けて、友達同士で応援したり、競い合ったりする姿を受け止め、満足感としての責任感をもてるようにする。 ・<u>遊びの中で友達が話していることを最後まで聞こうとしたり、自分の考えを話している。</u> ・一人一人の幼児が自分の意見や考えを十分に伝えるような雰囲気作りを努めるとできるようにする。 ・自分たちで遊びを進めていく楽しさを感じることができるよう、自分たちで遊ぶ楽しさやおもしろさに共感したりする。また、周りの幼児にも知らせたりしたり、試したりする意欲をもつことができるようにする。 ・身近な自然に関心が高くなるように、機会をとらえて投げかけたり地域に出かけたりまた、幼児の気付き・疑問・感動などを十分に受け止め、他児への刺激となるようにする。 ・自分より年下の異年齢児にやさしくかわっている姿を認め、周りの幼児にもよまわらせることができるようにする。 		

図3 A幼稚園の10月の指導案から抜粋

助のあり方について、③人とのかかわりを通して、言葉で伝え合う喜びが感じられるような遊びや活動についての3点を掲げて教育活動にあたっている。

A幼稚園の指導案（月案）には、「言葉のキャッチボールに関する項目」を設けており、ねらい、内容、環境及び教師の援助の欄には、必ず子どもの言葉の育成（話す・聞く・伝え合う）に関する記述を行った上で、その記述に下線を引いて教師が言葉の育成について常に意識を払える工夫をしている。

そして、以下の図4は、研究協議会での保育実践における指導案であるが、「話す・聞く・伝え合う」の項目を設け、それぞれの視点から、子どもの実態と教師の願い（教育目標）について指導案を作成している。A幼稚園が日々の保育実践の中で、言葉の育成において行っていることの一つに、降園前の一日の振り返りの時間がある。以前は、小学校低学年に取り入れられていた実践であるが、これは、クラスの友達の前で自分の思ったことや考えたことを伝えるという時間

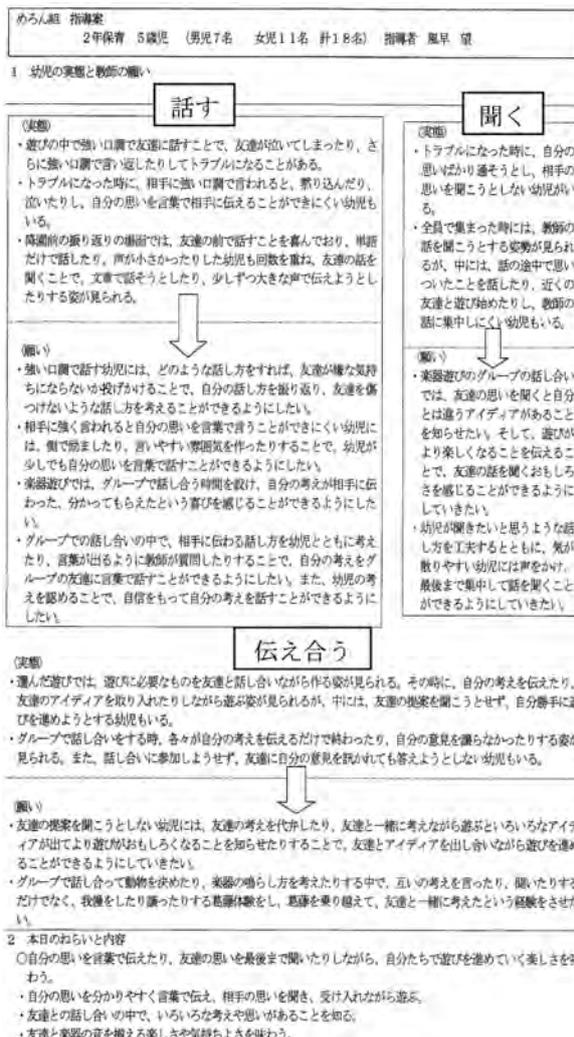


図4 A幼稚園の指導案「話す・聞く・伝え合う」

である。ここでは、相手に分かるように伝えるための工夫として、話しをする姿勢、声の大きさ、言葉遣い等の話す指導を行うと同時に、静かに聞く、話し手の顔を見ろといった外的要素、子ども達が話し手の内容を理解しているかといった内的要素についても確認し、聞く力の育成も意識的に行っている。なお、調査対象園の教師は、この実践を1年10ヶ月の間、園児に行ってきた。

また、A幼稚園では、自分のクラスの保護者だけでなく、違うクラスや学年の保護者にも絵本の読み聞かせ会や行事のボランティアなどの依頼をしている。その他にも、小学校の図書館司書の先生、図書委員の小学生や中学生にも絵本の読み聞かせにきてもらい、多くの人の話を聞く経験を意図的に積ませている。このように、保護者や地域の方々、教育関係者、小学生や中学生による絵本の読み聞かせ会は、月に2回の頻度で行っている。

3. 調査概要

(1) 調査対象園の選定について

岡山市には、現在68ヶ園の公立幼稚園がある。調査協力園の選定では、岡山市教育委員会指導課が発行している「平成25年度校園内研究の計画」を用いて行った。校園内研究計画には、研究計画と内容のほかに、各校園内にて特に力を注いでいる教育の項目に○印がつけられている。

表1 校園内にて特に力を注いでいる項目

	項 目		項 目
1	幼児理解	12	教育相談
2	環境の構成	13	キャリア教育
3	コミュニケーション力	14	人権教育
4	思考力・判断力・表現力の育成	15	福祉教育
5	学ぶ意欲の向上	16	健康教育・食育
6	道徳教育	17	危機管理・安全指導
7	総合的な学習の時間	18	マネジメント
8	小学校外国語活動	19	岡山型一貫教育
9	特別活動	20	地域協働学校
10	情報教育	21	E S D
11	特別支援教育		

上記の表1から、言語活動の充実に関するキーワードとして、「3. コミュニケーション力」と「4. 思考力・判断力・表現力の育成」の両方に○印がついて

いるものを「言葉の教育に特に力を入れている園：A群」とし、3と4の両方に○印がついていないものを「言葉の教育以外に力を入れている園：B群」として抽出した。その結果、A群の該当園は18ヶ園あり、B群の該当園は14ヶ園であった。そこから、調査では集団検査を実施するため、1クラス20名以上の園児が在籍している園を抽出し、A群の該当園が10ヶ園、B群の該当園が9ヶ園まで絞り込んだ。次に、クラス編成や小学校が併設されている等の地理的条件も含めて、比較的同質の園を選び、A群とB群から1ヶ園ずつ選定した。ここでは、A群から選定した園をA幼稚園とし、B群から選定した園をB幼稚園と表記する。

(2) 調査対象および調査方法

調査対象および調査方法については、以下である。

対象児：A幼稚園（年長）28名（1名欠席）とB幼稚園（年長）20名（4名欠席）の合計48名であった。平均年齢は6歳1ヶ月（5歳7ヶ月～6歳7ヶ月）であった。

実施場所：各園の静かな保育室に保育用の机を3列に並べ、一つの机に2人並んで座れるようにした。

調査方法：新訂京大NX5-8第2版を使用し、集団検査を実施した。京大NX知能検査は、文科系・理数系混合の知能テストであり、素点の集計高で標準化したものではなく、下位検査の素点毎にそれぞれ偏差値を算出している。テストは7種類から構成されており、手引きに記載されている内容と課題の番号を表2に記した。具体的な内容は、図5～図14である。「れんしゅう」部分のみを取り出して記載した。

表2 テストの構成

	内 容
1	基礎的な計数能力をみる (図5)
2	意味のある文章の記憶をみる (図6)
3	(1) 形式的な推理による関係把握をみる (図7) (2) 絵で与えられた場面を想像し、その状況に対する適応をみる (図8)
4	同一の図形を早く見出す能力をみる (図9)
5	(1) 概念を把握し異質のものを見出す能力をみる (図10) (2) 絵を時間的順序に配列する能力をみる (図11)
6	(1) 語の中から音声 (音いん) を抽出する能力をみる (図12) (2) 語の理解の能力をみる (図13)
7	言われたルールを理解し、迷路を誤りなく早く進む能力をみる (図14)



図5 数計算



図6 記憶



図7 推理



図8 了解

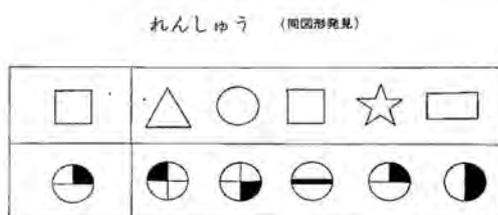


図9 同図形発見

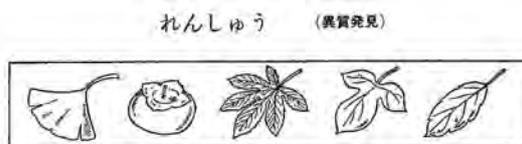


図10 異質発見



図11 時間的順序

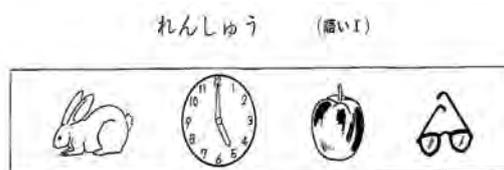


図12 語いI



図13 語いII



図14 迷路

人的体制：検査を主導する者が1名，補助として大学教員1名，学生ボランティア3名（実習を終了している者），クラス担任，補助教諭，園長先生の計8名であった。補助員は各列の左右に待機し，質問があった場合や困惑している様子が見てとれた場合には，子どもの近くに行き，テストの実施要領に定められた範囲で子どもの理解を助けた。

手続き：子ども全員が着席しているのを確認し，検査者たちの簡単な自己紹介を行う。その際，「学校ごっこ」に対するモチベーションが

高まるように話す。検査用紙を子ども一人に1冊ずつ配布し、鉛筆（くもん出版のこども鉛筆4B）を1本ずつ配り、検査の手引きにある配付前の注意事項表3の7番以外を話し言葉で伝えた。

表3 配付前の注意事項

	教 示
1	これから、この本でいろいろな勉強をしましょう。
2	今日は他人の ^{ひと} を見たり、教えてあげたりしないで、黙って一人でやりましょう。
3	もし、やり方が解らない時は、手をあげて下さい。
4	先生が見なさいと言った所だけ見ましょう。
5	先生が「やめ」と言ったら、途中でですすぐ止めて、手をひざの上に置きましょう。
6	もし、答えを間違った時は、それに×をつけ、よい答えに丸をつけましょう。
7	では、みなさんに1冊ずつ配りますがまだなかを開けてはいけません。

全検査を手引きに従って進めるが、知能の測定が目的ではないので、状況に応じて途中で終了することもあった。

4. 結果と考察

課題の意味が全く理解できていないと分かる4人（A幼稚園：1名、B幼稚園：3名）について分析から外した。また、子ども一人一人の理解を確認して進めることが必要であるが、確認できず中断した課題3は分析からはずした。

課題ごとに素点を出し、換算表に従って偏差値に変換した。表4にその平均値と標準偏差を示す。

表4 課題別幼稚園別下位項目偏差値

課題番号	A幼稚園	B幼稚園
1	57.04 (9.424)	53.53 (8.903)
2	51.89 (9.225)	57.00 (8.201)
4	57.52 (5.632)	57.47 (8.690)
5	50.00 (7.751)	50.65 (12.201)
6	51.52 (7.521)	54.12 (6.204)
7	54.04 (6.802)	53.94 (7.620)

*括弧内標準偏差

課題番号2, 5, 6は言語的側面を測るものであることから、3つの平均を出し、言語性という項目を設け、課題(4)×条件(2)の2要因分散分析を行った。課題は被験者内要因である。

その結果、A園とB園には違いがなく、課題の主効果(F(3,42)=4.481, p<.01)のみ有意であった。そこで、単純性主効果の検定を行ったところ、A園もB園も課題4が言語性課題よりも有意に良かった(F(3,42)=4.966, p<.01)。

各課題の性格を考えてみたい。課題1の内容は、検査者が課題を読み上げ、子どもはそれをよく聴き、指示に従って答えるというものであり、「計算力」以上に「聞く力」を必要とするものである。課題2は「聞く力」だけではなく、「覚える力」を必要とするものであった。課題4は「聞く力」と認知の能力を必要とするものであった。課題5は検査者の教示を聞いていなくても絵から類推の可能な問題であり、「聞く力」の必要性は他の問題に比べて低い。課題6は「聞く力」だけではなく、物の名前や用途を「知っている」こと、「知識」を必要とするものであった。課題7はルールをしっかりと聞かなくてはならず、「聞く力」と手指の巧緻性を必要とするものであった。

課題の性格を仔細に検討していくと、どの課題についても「聞く力」を必要とするものであり、課題間の違いを比較することにはあまり意味があるようには思えない。また、園の取り組みの違いを結果に反映しにくいことなどから、測定の難しさが浮き彫りになったように思われる。

5. おわりに

今回の調査は、岡山市の取り組みを含めて、A幼稚園を取り巻く中学校区の特徴も取り上げた。A幼稚園では、教師が幼少中連携教育の研究協議会に参加する中で、幼稚園における子どもの発達段階だけを気に留めるのではなく、小学校、中学校へと続く教育内容の接続を意識した教育を心掛けていることも教師のインタビューの中で拾うことができた。

A幼稚園で行われてきた「話す・聞く・伝え合う」の言葉の教育に関し、今回は「聞く力」の測定と評価に焦点を当てて調査および考察を行ったが、結果としては、各課題の言葉の教育に特に力を入れている園とそうでない園に有意な差を見ることができなかった。また、幼児期における言語活動の充実の教育効果の測定というには、「聞く力」の測定のみでは不十分だと言えるため、「話す力」、「伝え合う力」の測定および評価方法についても検討すべき今後の課題であるといえる。また、検査方法についても検討が必要である。集団検査の実施においては、園児が困惑している際に

は、テストの実施要領に定められた範囲で子どもの理解を助ける大人からの働きかけがあったが、そうした場面の対処に関しても再度確認をすべき事柄がみられた。たとえば、設問を繰り返す場合、同じ言葉を2度繰り返して伝えたり、数字を伝えるときに、指を立てて幼児に示してしまうことも見られたことである。

今回は、横断的研究から「聞く力」の測定を行ったが、当然のことながら、幼児の真の発達をとらえるためには、縦断的研究も必要となるだろう。

最後に、本調査結果に関しては、幼稚園の教育能力の差を示すものではないことを特に明記しておきたい。

(本研究は、財団法人福武教育文化振興財団の「子どもたちの学力向上を図る研究・実践活動への助成(公募)」にて行いました。)

引用・参考文献

- 京大知能検査研究会(1996)「新訂京大NX5-8 第2版(幼稚園・小1年用)手引」大成出版牧野書房
- 岡野聡子, 大野鈴子(2012)「幼児期における「言語活動の充実」に関する研究～岡山市公立幼稚園教諭を対象としたアンケート調査から～」環太平洋大学研究紀要第6号, pp.19-26
- 岡本夏木(1995)『小学生になる前後-五～七歳児を育てる』岩波書店, pp.184-185
- 岡山市教育委員会指導課(2013)「平成25年度 校園内研究の計画」
- 岡山市・岡山市教育委員会(2007)「岡山っ子育成条例リーフレット」
<http://www.city.okayama.jp/contents/000039565.pdf> (2013.11.20)
- 芝崎良典, 芝崎美和(2011)「幼児期における「聞く」力の発達的变化」日本教育心理学会総会発表論文集(53), p. 55
- 中央教育審議会答申(2005)「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について-子どもの最前の利益のために幼児教育を考える-」
- (2008)「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」
- 中澤潤, 八木龍治, 小野美紀, 中澤小百合(1987)「幼児の言語活動の発達に関わる要因分析」千葉大学教育学部研究紀要. 第1部35, pp.213-227

文部科学省(2011)『言語活動の充実に関する指導事例集 小学校版-思考力, 判断力, 表現力等の育成に向けて』教育出版

文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター(2012)『全国学力・学習状況調査の4年間の調査結果から今後の取組が期待される内容のまとめ-児童生徒への学習指導の改善・充実に向けて 小学校編』教育出版